（八）稲取・はんまあさま

稲取では、九月八日に「はまゆうの葉」で武士の人形や、サンマやイカなど魚を形どったものを作ります。この葉で作った武士の人形や魚などを家の床の間で一日祀り、次の日に海に流します。このときに「サンマやイカになって帰ってこらっしぇーよ。」と泣きながら流し、魚がたくさんとれることを祈る行事があります。

この行事は「はんまあさま」といわれますが、「はんまあさま」と呼ばれる理由は「はまゆう」がなまったものともいわれています。また、この行事は九月九日に行われますが、三月三日の半年後に行われていることや、人形を流すことから「ひな祭り」と関係するなどともいわれています。

この行事は、稲取にしか伝わっていない大変めずらしい行事です。このため国から平成十四年（二〇〇二年）に「記録作成等の措置を講ずべき無形の文化財」に選ばれています。

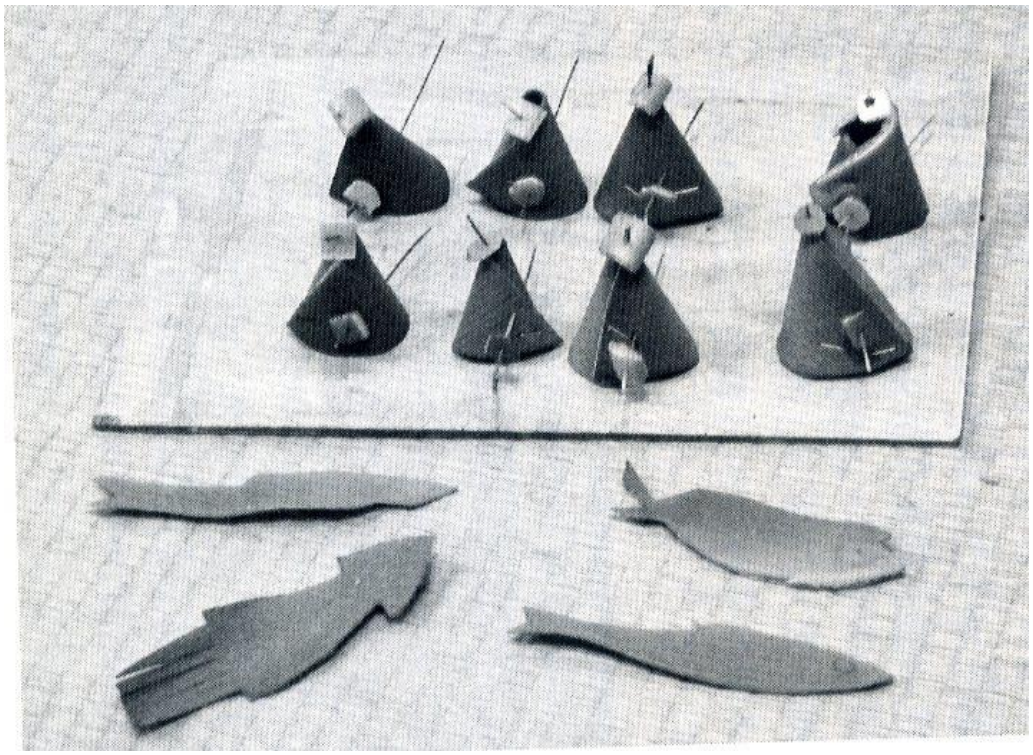
「はんまあさま」には、次のようなお話が伝わっています。

昔、稲取が小さな漁村であったころのお話です。その年は、漁師たちが魚を釣りに行ってもまったく釣れず、ぼんやりと海を見る日が続きました。

そんなある日、漁師が海を見ていると沖にたくさんのカモメが群れて飛んでいました。カモメがたくさん飛んでいるのは、その下でたくさんの魚が集まっている目印であり、これは「とりやま」といわれています。

「とりやま」を見つけた漁師たちは、久しぶりにたくさんの魚の群れが来たと喜び、「とりやま」を目指して勢いよく舟をこぎ出して行きました。しかし、漁師たちが「とりやま」に着くと、そこには魚の群れはなく、丸太を組んだいかだが浮かんでおり、戦いに敗れた何人かの武士が亡くなっているではありませんか。久しぶりに魚が取れると思った漁師た

ちはがっかりしました。しかし、そうかといってこのまま港に帰るわけにはいきません。なぜなら漁師は海で亡くなった人を見つけたら、陸まで運んでお墓などに祀り、供養することになっていたからです。

そこで漁師たちは、「今、みんな漁がなくて困っている。今日も「とりやま」だと思ってきたが、大勢の仏様だ。だが、この仏様をこのままにしておくわけにもいかねえ。　みんなで手厚く葬(ほうむ)ってやるべえ。」といって、亡くなった武士たちを陸まで運び、お墓を建てて供養しました。

それから稲取ではサンマとイカがたくさん取れるようになりました。漁師たちはこれを喜び、毎年、浜にあるはまゆうの葉で武士やサンマ、イカを形どった人形を作り、家の床の間にお酒や柏餅(かしわもち)を供えて祀り、次の日に泣きながら唱えごとをして流すようになったとのことです。